

津波で甦った花 ミズアオイを守る

岩手県立大学 総合政策学部 平塚 明

(E-mail:hiratsuk@iwate-pu.ac.jp)

ミズアオイ *Monochoria korsakowii* はミズアオイ科の一年草。東アジアに分布し、田、水路、湿地に生育する。圃場整備や除草剤のために減少し、絶滅のおそれのある



野生植物として国や県のレッドリストに掲載されている。

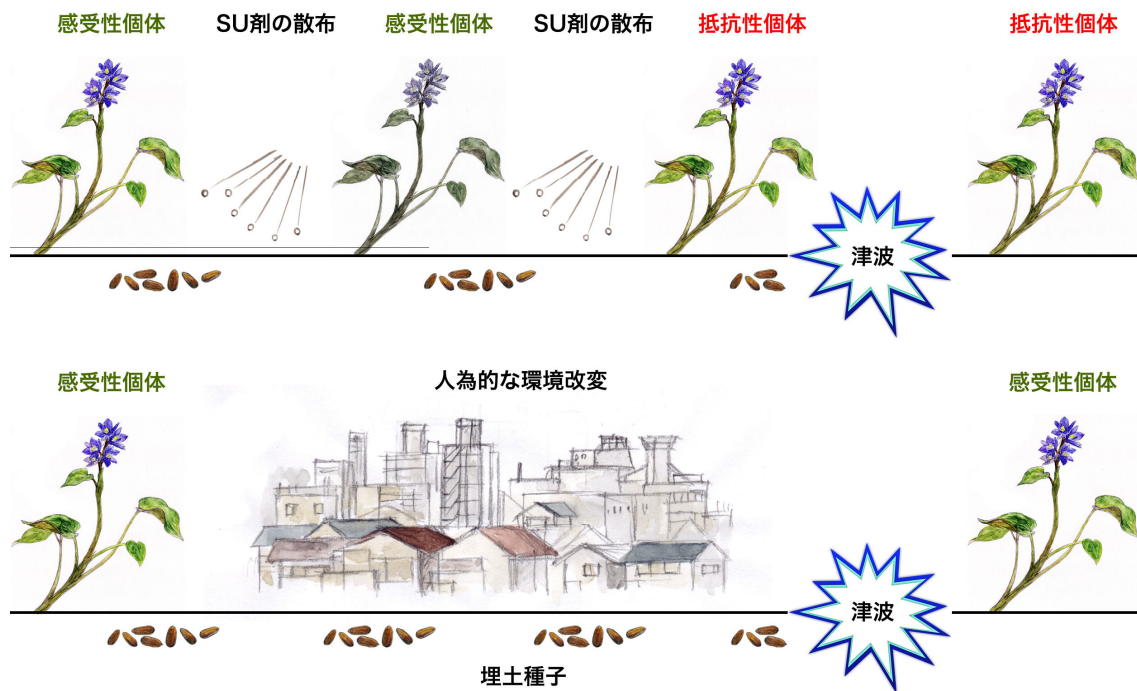
かつては日本人に愛され、その後、疎まれるようになった植物です。20011年3月11日、東日本大震災は沿岸の自然に大きな被害を与えました。ところが、それまで姿が見られなかった場所から突如出現した美しい青い花の群落が、人々を驚かせました。しかも、それは絶滅危惧植物だったのです。震災からの再生を象徴する不思議な植物ミズアオイと保全活動についてご紹介します。

岩手・宮城・福島津波浸水域から出現したミズアオイ。元は田んぼだったところが多いのですが、町の中心部の住宅街から出現した例もあります。これは堤防や道乗り越えた津波が裏側に勢いよく落ちるときに、そこをえぐり取り(洗掘)、深く埋まっていた種子を掘り出して、発芽を促したからだと考えられます。そんなに大量に復活しているのなら、今さら守らなくてもよいのではないかと思います。この復活は束の間のもので、復興工事で嵩上げなどで、ミズアオイは今度こそ、二度と目覚めることのない深みに埋められつつあります。私たちは、沿岸を往復しながら生き残った個体の種子と葉を集めました。一部は内陸に設置したビオトープで育て、系統を維持しています。

そもそも、この種類は稲作とともに日本に入ってきたと言われています。大昔の水田でイネとミズアオイは一緒に育てられ、食べられていたことは万葉集などの記述から明らかです。またその美しい花は多くの絵画、焼き物、工芸品のモチーフになりました。ところが江戸時代中期以降、水田ではイネの生産だけが求められるようになり、さらにおいしい葉菜



が普及するにつれ、ミズアオイは単なる邪魔者として除草の対象となりました。近代になってとどめを刺したのが除草剤(SU剤)です。こうして日本中からほとんどのミズアオイが消えました。しかし、ミズアオイはきれいなだけの植物ではありません。おしべとめしべの配置が、互いに鏡に映したように逆向きの二種類の花を持っています。この二つの花によって他家受粉を促し、多様性を高めています。日本で初めて、除草剤への抵抗性を獲得した個体が生まれたのです。



作画: 佐々木友美

上の図は左側の過去から右側の現在にかけて、ミズアオイの辿った二つの経路を描いたものです。ミズアオイは除草剤(SU剤)によって著しく数を減らしました。しかし、薬を繰り返し使いすぎたために、抵抗性をもったタイプが進化しました。それ以前に、土地利用の変化で生育地を失ったミズアオイは、地中深く種子として長い年月を過ごした後、今回の津波で甦りました。それは古い感受性タイプです。

津波の記憶をとどめたミズアオイは、植物界の震災遺構です。私たちは被災地に共存する二つのタイプのミズアオイを今後も保全していきます。

圧痕レプリカ法

縄文時代や弥生時代の土器の表面に、その頃の植物のたねの圧痕が残っています。考古学者は圧痕に歯の治療で使うシリコンゴムを注入し、型(レプリカ)を取ります。その型を顕微鏡で観察し、何のたねなのかを判定します。今回は、大昔の田畑でミズアオイと一緒に生えていた可能性のある植物の圧痕タブレットを用意しました。圧痕レプリカ法で植物の種類を判別してみてください。